

日蓮大聖人御書全集

うえのどのごへんじ

上野殿御返事

とうじょうなん こと

（刀杖難の事）

新版
1888
〜
1892

うえのどのごへんじ とうじょうなん こと
上野殿御返事（刀杖難の事）

こうあん ねん がつ にち さい なんじょうときみつ
弘安2年（'79）4月20日 58歳 南条時光

にちれん しゅじゅ だいなん なか たつ くち くび ざ
そもそも、日蓮、種々の大難の中には竜の口の頸の座と

とうじょう なん 過 ゆえ しよなん なか いのち 捨
東条の難にはすぎず。その故は、諸難の中には命をすつる

ほど だいなん 罵 責 ところ 追
程の大難はなきなり。あるいはのり、せめ、あるいは処をお

むじつ い 付 おもて 打 もの
われ、無実を云いつけられ、あるいは面をうたれしなどは物

数 しきしん にほう 起 謗
のかずならず。されば、色心の二法よりおこりてそしられた

もの にほんこく なか にちれんいちにん
る者は、日本国の中には日蓮一人なり。ただし、ありとも、

ほけきょう ゆえ
法華経の故にはあらし。

忘

少 輔 房

ほけきよう

さてもさてもわすれざることとは、しようぼうが法華經の

だいご まき と にちれん

面 打

さんどく

起

第五の巻を取って日蓮がつらをうちしことは、三毒よりお

打 擲

こるところのちようちやくなり。

てんじく しつと によにん

おとこ

憎

ゆえ

けない もの

天竺に嫉妬の女人あり。男をにくむ故に、家内の物をこ

う

うえ

はらだ

とごとく打ちやぶり、その上に、あまりの腹立ちにや、

姿 気 色

まなこ

にちがつ

ひかり

輝

すがたけしきかわり、眼は日月の光のごとくかがやき、

口 ほのお 吐

姿

あおおに

あかおに

くちは炎をはくがごとし。すがたは青鬼・赤鬼のごとくに

としごろおとし

読

たてまつ

ほけきよう

だいご

まき

取

りよう

あし

て、年来男のよみ奉る法華經の第五の巻をとり、両の足

散 々 踏

のち

いのち 尽

じごく

墮

にてさんざんにふみける。その後、命つきて、地獄におつ。

りよう

あし

じごく

入

ごくそつ

てつじよう

打

両の足ばかり地獄にいらす。獄卒、鉄杖をもつてうてど

入

もいらす。これは、法華經をふみし逆縁の功德による。

いま にちれん

憎

ゆえ

少

輔

房

だいご

まき

と

よ

今、日蓮をにくむ故に、しようぼうが第五の巻を取つて予

面

打

ぎやくえん

かれ

てんじく

がおもてをうつ。これも逆縁となるべきか。彼は天竺、こ

にほん

によん

男

りよう

足

れは日本。かれは女人、これはおとこ。かれは両のあし、

りよう

て

かれ

しつと

ゆえ

ほけきよう

おんゆえ

これは両の手。彼は嫉妬の故、これは法華經の御故なり。

ほけきよう

だいご

まき

同

か

によん

されども、法華經の第五の巻はおなじきなり。彼の女人の

足 じごく

い

りよう

てむけん

い

あし地獄に入らざらん、この両の手無間に入るべきや。

かれ

おとこ

憎

ほけきよう

憎

ただし、彼は男をにくみて法華經をばにくまず。これは

ほけきよう にちれん

憎

いつしんむけん い

きよう

法華經と日蓮とをにくむなれば、一身無間に入るべし。經

い

ひと みようじゅう

あびごく い

うんぬん

に云わく「その人は命終して、阿鼻獄に入らん」と云々。

て

むけん い

み ふびん

ふびん

手ばかり無間に入るまじとは見えず。不便なり、不便なり。

にちれん

遇

ぶつか 得

ふきようぼさつ じようまん

ついには日蓮にあいて仏果をうべきか。不輕菩薩の上慢の

ししゅ

四衆のごとし。

そ

だいご

かん

いつきようだいいち

かんじん

りゅうによ

夫れ、第五の卷は一經第一の肝心なり。竜女が

そくしんじようぶつ

明

だいば

心

じようぶつ

表

即身成仏あきらかなり。提婆はこころの成仏をあらわし、

りゅうによ

み

じようぶつ

表

いちだい

ぶんた

ほうもん

竜女は身の成仏をあらわす。一代に分絶えたる法門なり。

でんぎようだいし

ほけきよう

いつさいきよう

ちようか

すぐ

さてこそ、伝教大師は法華經の一切經に超過して勝れた

ることを十あつめ給いたる中に、即身成仏化導勝とはこ

ほうもん てんだいしゆう さいやう

そくしんじょうぶつぎ

のことなり。この法門は天台宗の最要にして、即身成仏義

もう

もんく

ぎか

しんごん

てんだい

りやうしゆう

そうろん

と申して、文句の義科なり。真言・天台の両宗の相論な

りゆうによ

じやうぶつ

ほけきやう

くりき

もんじゆしりぼさつ

り。竜女が成仏も法華經の功力なり。文殊師利菩薩は

ゆいじやうせんぜつみやうほけきやう

つね

みやうほけきやう

せんぜつ

「唯常宣説妙法華經（ただ常に妙法華經のみを宣説す）」

語

たま

ゆいじやう

にじ

はちじ

なか

かんやう

とこそかたらせ給え。「唯常」の二字は八字の中の肝要な

ぼだいしんろん

ゆいしんごんほうちゆう

しんごん

ほう

なか

り。菩提心論の「唯真言法中（ただ真言の法の中にのみ）」

ゆい

じ

いま

ゆい

じ

もと

の「唯」の字と、今の「唯」の字と、いずれを本とすべき

か

ゆい

じ

誤

や。彼の「唯」の字は、おそらくはあやまりなり。

むりようぎきよう

い

しじゅうよねん

しんじつ

あらわ

無量義經に云わく「四十余年にはいまだ眞実を顕さず」。

ほけきよう

い

せそん

ほうひさ

のち

かなら

まさ

しんじつ

法華經に云わく「世尊は法久しくして後、要ず当に眞実を

と

たほうぶつ

みな

しんじつ

ほけきよう

説きたもうべし」。多宝仏は「皆これ眞実なり」とて、法華經

限

そくしんじようぶつ

定

たま

にぜんきよう

にかぎりて即身成仏ありとさだめ給えり。爾前經にいかよ

じようぶつ

説

ごんしゅう

ひとびとむりよう

言

狂

うに成仏ありともとけ、權宗の人々無量にいいくると

焙

烙

せん

ひと

ほつけ

しやくぶく

も、ただほうろく千につち一つなるべし。「法華の折伏は

ごんもん

り

は

ひおう

權門の理を破す」とは、これなり。もつともいみじく、秘奥

ほうもん

てんだい

がくしや

じかく

げん

もん

なる法門なり。また天台の学者、慈覺よりこのかた、玄・文・

し

さんだいぶ

もん

料

簡

ぎり

構

止の三大部の文をとかくりようけんし義理をかまうとも、

こぞ 暦 きょう じき 今日 日 ゆう

去年のこよみ、昨日の食のごとし。きょうの用にならず。

まつぼう はじ ごひやくねん ほけきょう だいもく 離 じようぶつ

末法の始めの五百年に法華經の題目をはなれて成仏あり

ひと ぶつせつ もち

という人は、仏説なりとも用ゆべからず。いかにいわんや

にんし ぎ

人師の義をや。

にちれんおも 様 だいばほん あん だいば しやかによらい

ここに日蓮思うよう、提婆品を案ずるに、提婆は釈迦如来

むかし し むかし し いま でし いま でし 昔

の昔の師なり。昔の師は今の弟子なり。今の弟子はむかし

し ここん のうしよふに ほつけ じんい 表

の師なり。古今、能所不二にして、法華の深意をあらわす。

あくぎやく だった じひ しやかによらいし ぐち

されば、悪逆の達多には慈悲の釈迦如来師となり、愚癡の

りゆうによ ちえ もんじゆし もんじゆ しやかによらい にちれん

竜女には智慧の文殊師となり、文殊・釈迦如来にも日蓮

劣 たてまつ

おとり 奉るべからざるか。日本国の男は提婆がごとく、

おんな りゆうによ

相 似

ぎやくじゆん

じようぶつ

ご

女は竜女にあいにたり。逆順ともに成仏を期すべきな

だいばほん こころ

り。これ提婆品の意なり。

つき

かんじほん

はちじゆうまんおくなゆた

ぼさつ

いくどうおん

次に、勸持品に八十万億那由他の菩薩の異口同音の

にじゆうぎよう

げ

にちれんいちにん 読

たれ い

にほんこく

とうど

二十行の偈は、日蓮一人よめり。誰か出でて、日本国・唐土・

てんじく さんごく

ほとけ

めつご

読

ひと

われ 読

天竺、三国にして、仏の滅後によみたる人やある。また我よ

名 乗

ひと

おぼ

みたりとなのるべき人なし。また、あるべしとも覚えぬ。

とうじよう

くわ

とうじよう

に じ

なか

つえ

「および刀杖を加う」の「刀杖」の二字の中に、もし「杖」

じ 遭

ひと

かたな

じ

遭

ひと

聞

の字にあう人はあるべし。「刀」の字にあいたる人をきかず。

ふきようぼさつ

じようもく

がしやく

み

つえ

じ

遭

不輕菩薩は「杖木・瓦石」と見えたれば、杖の字にあいぬ、

かたな なん 聞

てんだい

みようらく

でんぎようとう

とうじよう

くわ

刀の難はきかず。天台・妙楽・伝教等は「刀杖も加えず」

み

欠

にちれん

とうじよう

にじ

と見えたれば、これまたかけたり。日蓮は「刀杖」の二字と

遭

かたな

なん

さき

もう

もにあいぬ。あまつさえ、刀の難は、前に申すがごとく、

とうじよう

まつばら

たつ

くち

いちど

遭

ひと

にちれん

東条の松原と竜の口となり。一度もあう人なきなり。日蓮は

にど

つえ

なん

少

輔

房

面

打

二度あいぬ。杖の難には、すでにしようぼうにつらをうたれ

だいがこ

まき

打

打

つえ

だいがこ

まき

打

しかども、第五の巻をもつてうつ。うつ杖も第五の巻、うた

い

きようもん

ご

まき

ふしぎ

みらいき

きようもん

るべしと云う経文も五の巻、不思議なる未来記の経文なり。

少

輔

房

にちれんすうじゆうにん

なか

打

とき

されば、しようぼうに日蓮数十人の中にしてうたれし時の

しんちゆう

ほけきよう

ゆえ

思

ほんぷ

心中には、法華經の故とはおもえども、いまだ凡夫なれば、

うたてかりけるあいだ、つえをもうばい、ちからあるなら

踏折捨

杖

奪

力

杖

ほけきよう

ばふみおりすつべきことぞかし。しかれども、つえは法華經

ごまき

の五の巻にてまします。

思

出

こ

おも

ゆえ

親

槻

いまもいいでたることあり。子を思ふ故にや、おや、つき

きゆみ

がくもん

こ

教

の木を弓をもつて学文せざりし子におしえたり。しかるあい

こ

ちち

憎

槻

き

ゆみ

だ、この子、うたてかりしは父、にくかりしはつきの木の弓。

つい

しゅがくぞうしん

じしんとくだつ

極

ひと

されども、終には修学増進して自身得脱をきわめ、また人を

りやく

み

た

かえ

み

槻

き

われ

利益する身となり、立ち還つて見れば、つきの木をもつて我

打ち ゆえ こ 卒塔婆 き 造 ちち くよう
をうちし故なり。この子、そとばにこの木をつくり、父の供養

立 み
のためにたててむけりと見えたり。

にちれん
日蓮もまた、かくのごとくあるべきか。日蓮、仏果をえん にちれん ぶつか 得

少 輔 房 おん 捨
に、いかでかしようぼうが恩をすつべきや。いかにいわんや、

ほけきよう ごおん つえ
法華經の御恩の杖をや。かくのごとく思いつづけ候えば、

かんるい 押
感涙おさえがたし。

ゆうしゆつぽん にちれん
また、涌出品は、日蓮がためにはすこしよしみある品な 誼 ほん

ゆえ
り。その故は、上行菩薩等の末法に出現して じようぎよう ぼさつ とう まつぽう しゆつげん

なんみようほうれんげきよう ごじ ひろ
南無妙法蓮華經の五字を弘むべしと見えたり。しかるに、 み

にちれんいちにんしゅつたい

ろくまんごうじゃ

ぼさつ

定

ちゅうしよう

まず日蓮一人出来す。六万恒沙の菩薩よりさだめて忠賞

被

おも

頼

をかぼるべしと思えば、たのもしきことなり。

ほけきよう

み

任

しん

たま

とのいちにん

とにかくに、法華經に身をまかせ信ぜさせ給え。殿一人に

限

しんじん

たま

かこ

ふぼとう

救

かぎるべからず、信心をすすめ給いて、過去の父母等をすく

たま

わせ給え。

にちれん

う

とき

いちにちかたとき

心

安

日蓮、生まれし時よりいまに一日片時もこころやすきこと

ほけきよう

だいもく

ひろ

おも

はなし。この法華經の題目を弘めんと思うばかりなり。相

あい

構

あい

じた

しようじ

知

ごりんじゅう

かまえて相かまえて、自他の生死はしらねども、御臨終の

刻

しようじ

ちゅうげん

にちれん

迎

参

そうろう

きざみ、生死の中間に、日蓮かならずむかいにまいり候べ

さんぜ しよぶつ じようどう

子 丑

終

寅

刻

し。三世の諸仏の成道は、ねうしのおわりとらのきざみの

じようどう

ぶつぼう

じゆうしよ

きもん

かた

さんごく

立

成道なり。仏法の住处、鬼門の方に三国ともにたつなり。

そうじよう

ほうもん

くわ

もう

これらは相承の法門なるべし。委しくは、またまた申すべ

そうろう

きようきようきんげん

く候。恐々謹言。

飢

じき

願

かつ

みず

慕

こ

かつえて食をねがい、渴して水をしたうがごとく、恋い

ひと

み

やまい

薬

頼

て人を見たきがごとく、病にくすりをたのむがごとく、

見

目

形

ひと

紅

白

物

付

みめかたちよき人、べに・しろいものをつくるがごとく、

ほけきよう

しんじん

到

たま

こうかい

法華経には信心をいたさせ給え。さなくしては後悔あるべし

うんぬん

云々。

こうあんになんつちのとううづきはつか
弘安二年己卯卯月二十日

うえのどのごへんじ

上野殿御返事

にちれん
日蓮

かおう
花押